

# Gプロジェクト2015

パズル～繋がるpiece 届けるhappiness～

佐々木 亘, 森永 初代, 濱崎 千鶴, 中村 民恵, 末永 勝征

G Project 2015

– Puzzle: Let's Connect the Pieces and Send Happiness –

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,  
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

---

Gプロジェクトとは、学芸、情報、テキスタイル（モード部門・パッチワーク部門）、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマは「パズル～繋がるpiece届けるhappiness～」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。さらに、錦江町との連携事業「地域貢献プロデュース」も3年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出を行ったかを、学生たちのレポートを中心に報告する。

**Key Words:** [問題解決能力] [協働] [大学祭] [パズル] [地域連携] [学士力]

(Received September 26, 2016)

## 序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた5つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。2015年度は後述しているが、学士課程教育の構築などの中央教育審議会答申を受け、教育課程の体系化や単位制度の実質化、教育方法の改善など学士力への取り組みも始めた。

今回は、学生一人ひとりが「パズル～繋がるpiece 届けるhappiness～」という想いを共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。学芸プロデュースは「絆」という動く絵本で発表部門の3部構成の第1部を演出した。情報プロデュースは、さまざまな活動を

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

行ったが、とくに発表部門の第2部では「感謝」というテーマによる映像でGプロジェクトを総合的に印象づけ、テキスタイルプロデュース（モード部門）は、「自立」というテーマでドレス制作を通して表現力を養い、発表部門の第3部では、一人ひとりがそれぞれ個性的な演出を試みた。またテキスタイルプロデュース（パッチワーク部門）では、共同制作やくるみボタンのヘアゴム制作を通じて大学祭を盛り上げた。そして、フードプロデュースは、アップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで新製品を開発するなど、1・2年生が一致団結して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに、三年目をむかえる地域貢献プロデュースは、錦江町の方々と協力し純心水田プロジェクトを行うなど、精力的に活動した。特にローソンで販売された「生どら焼き」は好評を博した。

新たにGプロジェクトは、学士課程教育における学士力を意識し、地域貢献を除く五つのプロデュースで、シラバスの到達目標を統一した。前期は、全体の目標を正しく理解し、課題を解決する中で新たな課題を設定し、目標を実現するための具体的な実行計画を立案する能力の育成を到達目標としている。これらの点は、各プロデュースでばらつきはあるにせよ、大学祭を一つの評価基準とするならば、おおよそ達成できたと言えよう。後期では、集団での協働の中で自分の役割を明確にして実行する。目標を実現するための計画を臨機応変に見直し、実行する。そして、各プロデュースでの活動を通じて体得された知識や経験を前提として、特定の専門的領域での議論が可能になる。これらの目標も、大学祭と卒業論文を一つの評価基準とするならば、多くの学生が達成できたと考えられる。

これらの到達目標は、現代ビジネスコースの学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に沿った指標であり、2016年度にはプロデュースの名称変更や学士力に関する主な内容として「知識・技術・理解」「汎用的能力」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」を基にした測定方法の改善に取り組む予定である。

本報告は、2015年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告を一つの反省材料として、さらなる発展を模索していく。

## I. 情報プロデュース

2015年度前期は、個々の課題や分担を決めて取り組むことが多く、例年、情報共有がうまくいかない。計画的に物事をすすめられないことが反省として挙げられる。そのため、2015年度前期単位認定試験期間中に前期の活動報告会を行うことにした。報告会はビデオ撮影を行い、自分自身で発表を振り返り、また他のメンバーから指摘された改善点にもとづき、発表資料の修正を行った。自分にとって当たり前前のが他の人にとっては理解されず説明が必要な場合がある。大学祭に向けての動画制作においては、一人では作品を完成させることができない。前期の活動を振り返ることで、情報共有の大切さを再認識する良い機会となった。

正しく情報を伝達するためにどうしたら良いかを意識すること、そして、相手に理解してもらうためにはSNSなどで連絡するだけでなく直接話し合いを行うことも必要であると理解されたであろう。また、計画的に物事をすすめるために、今年度は学生間で計画係なるものを決

め、活動していた。担当の学生からは、計画した時間内に終わらないことがあり、余裕を持った計画を立てることや、計画したことではなく別のことを行っている場合があるため声をかけあい注意を促すことなど、反省と改善点について報告があった。

特に後期になり、大学祭に向けて作品を仕上げるまでは、前期の遅れを取り戻し、全員で協力して良い作品を作ろうと、それぞれが懸命に取り組んでいた。大学祭後は、卒業論文に向けてそれぞれ課題を設定し活動していたが、大学祭という目標を失い、一致協力して活動することが難しい状況にあった。後期単位認定試験期間中は、卒業論文の進捗状況を報告し、学生同士で読み合わせなどを行い、お互いの不備を指摘し合う時間とした。

ネットや文献で情報収集するだけでなく、作成した作品の作り方の解説や活動の記録のまとめが中心であるため、どこからか引用した文章を貼り合わせたような場合には、何度も書き直しを行うことになる。中には勝手に限界を決め、自分には無理だと訴える学生もいたが、最後まであきらめずに取り組むことができたのは、大学祭まで真剣に意見を出し合い、本音でぶつかりあった仲間の存在が大きい。大講義室に設置された新しいLED照明の使い方や卒業論文の書き方など、本年度も後輩に引き継ぐために自分たちの経験を残してくれた。

途中で空中分解しそうになる協力体制を終盤で持ち直すことができたのは、個性的なメンバーの一人ひとりがお互いの役割を理解し行動したからだと考える。2016年度は、卒業論文の中間報告会を行うことで、早い段階で意識付けを行いたい。2015年度の取り組みの詳細については、チーフである亀澤さくらの報告を参照されたい。(森永初代)

情報プロデュースでは、さまざまな場面でWindowsやMacのソフトを利用しながら、実践的なパソコンの活用ができるよう力を合わせてきた。前期の活動は、学内行事の撮影や名前シール・名刺の作成、新聞作成に取り組んだ。5名という少ない人数にもかかわらず、はじめのうちうまく役割分担をすることができなかった。各自で使えるようになったアプリケーションの使用法の共有がうまくできず、二度手間となることもあった。

体育祭の撮影では、事前に当日のスケジュールと撮影内容にもとづき計画を立て、撮影許可を得たうえで臨むことができた。しかし、私たちの撮影している姿を見た他の学生たちまでも撮影を行ったため、競技の進行を妨げることとなり、体育館内での撮影は禁止され、8階から撮影する事態が発生した。

体育委員と昼食時間に先生方へ謝罪し、もう一度体育館内での撮影許可をいただくことができた。午後からは記録としての撮影であることを再度意識し、試合の妨げにならないようさらに注意した。この失敗によりメンバー全員が自分たちの立場を意識しながら撮影することを心掛けるようになった。

このほか、学校周辺の案内図を作成し、2015年5月23日に行われた「一人暮らしの集い」で配布することができた。2015年度は本学近隣に住む2年生を対象に、よく利用している店についての聞き取り調査を実施後、店と道路を下書きした地図を作成し、学芸プロデュースにイラスト化を依頼した。案内図は、一人暮らしの集いを主催する学生課をはじめ、事務局の先生方の意見も取り入れ、実際に歩き、実用性についての確認も行った。そのため完成は当初の予定より大幅に遅れたが、2014年度版に比べ美容院や飲食店なども記載することができ、利用者の

ニーズに合ったものを作成することができた。

大学祭では、例年通り、現代ビジネスコース「発表部門」として映像を作成した。作成の際、使用したアプリケーションはiMovieとKeynote、GarageBandである。2015年度はコーステーマであった「パズル～繋がるpiece届けるHappiness～」をもとに、現代ビジネスコースの繋がりに着目し、さまざまな個性を持つ私たちがお互いに補い合い、まとまっていく姿を表現できるようなムービーの作成を目指した。

ムービーのコンセプトは、自分を支え、成長させてくれた相手への「感謝」とした。使用した曲は西野カナの「HAPPY HAPPY」である。2015年度は現代ビジネスコース2年生から「友人」、「地域貢献で関わった錦江町の方々」、「後輩」、「卒業生」、「先生」への感謝のメッセージと関連する写真を使用した動画に加え、本コースのテーマであるパズルを意識し、レゴを使用して動画を撮影した。

撮影では、私たちのイメージを出演者にうまく伝えることができず苦戦することが多かった。また、スケジュール調整が難しく、失敗を繰り返すうちに、どのような素材が必要であるかを明確にし、効率よく作業できるよう具体的な計画を立てた。

4月から、現代ビジネスコースの発表部門であるモード・学芸・情報のチーフ・サブチーフの6人で毎週月曜日にミーティングを行い、各プロデュースの進捗状況などを報告し、お互いに作品の内容、デザイン、コンセプトを把握することで、各プロデュースで統一感のある作品を作れるよう話し合った。しかし、半年にも及ぶ活動期間の途中で中だるみが生じたこともあり、ミーティングの在り方について考え直す必要があったと考える。次年度以降は、ミーティングを開催するだけで満足しないよう注意してほしい。



図1 レゴブロックを使用した撮影

2015年度は作品の構成や計画の甘さから作品が出来上がったのは9月中旬になってしまった。それは、計画の段階でどのような素材が必要であるか具体的に考えていなかったことにある。その反面、さまざまな表現方法に挑戦することができた。例えば、レゴブロックを使用することにより、人との繋がりやお互いに協力する様子を視覚的に表現したこと（図1）、学生にメッセージを読んでもらい、その音声を挿入したことが挙げられる。また、第1部と第2部との繋がりにも重点を置いて作成した。個性豊かなメンバーの意見を一つの動画に反映させることは非常に難しく、先生方や先輩方の指導やアドバイスを受け、何度も話し合いを重ねた。お互いの考えや目指す方向性がクリアになることで、作品の完成度も高まり団結力も強まっていった。

今回、情報プロデュースとして大学祭での発表の成功を目指し、メンバーや他のプロデュースとともに活動を進め、かけがえのない経験を積むことができた。動画を作成していく中で、真剣に取り組まなければ、必ずどこかで問題が発生してしまうことを痛感した。これは、発表部門だけでなく、大学祭全体に通じることである。時に、自分に甘くなってしまうこともあったが、そういった瞬間の先にはいつも後悔が生まれた。その反面、メンバーと意見がまとまった時、無事に舞台発表を終えることができた達成感は、本当に格別だった。

情報プロデュースの活動は、初めて体験することばかりで、パソコンをはじめとするデジタル機器の操作も思い通りにならず、もどかしく感じることもあった。しかし、この活動を通して出会った人のお蔭で、分からないことにも挑戦することの楽しさを感じながら取り組めるようになった。無事に完成させることができたのは多くの人の支えがあったからである。卒業しても、人との繋がりを大切に、どんなことにも真剣に取り組み、常に周りへの感謝の気持ちを持って行動するよう心掛けたい。(亀澤さくら)

## Ⅱ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースでは、共同研究として、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。2015年度は、人数が3名と少なかった。しかし、「絆」というタイトルからもうかがえるように、メッセージ性に満ちた良い作品になったと考えている。大学祭2日目の2015年10月25日(日)に、発表部門の第1部を、無事飾ることができた。

成功の要因はいくつか考えられるが、何と云っても3人の個人的力量が非常に優れていたことが大きい。作品の核となるシナリオと絵コンテを前期の最後になって書き直すことになって、どうなるかと心配したが、夏休み中に見事完成させたのである。3人の息の合った作業は、見ている方も心地よかった。絵をかく技術だけではなく、パソコンを操作する能力も秀でていた。60枚ほどの原稿を短時間で難なく処理できたことは驚嘆に値する。

ただし、これまで続いていた『学芸プロデュース卒業論文集』の製本が、今回途切れてしまったことは大変残念である。この点、学生の計画性のなさに対する認識が甘かったと反省している。大学祭の後は、どうしても「燃え尽き症候群」のようになってしまう。学芸プロデュースが他のプロデュースと違い、図書館に論文集を寄贈していることを、明確に認識させなければならなかったのである。今後はこのようなことがないように、しっかり指導していきたい。(佐々木亘)

2015年度学芸プロデュースの共同研究では、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。学芸プロデュースが始まってまだ数年しか経っていないが、今年度のメンバーが特に意識した作品は2013年度の動く絵本「Honest feeling ～素直な気持ち～」である。私たちはこの作品を超えることを目標にした。

先輩方からの引き継ぎや改善点から、私たちは早めに動画を作るということにした。具体的な期限としては、8月の夏休みまでに一通りの動画を作り、残り2か月は細かい修正をするということになっていた。

ところが、2015年度はメンバーが3名という少人数であったため、作業の分担が難しくなった。また、部活や他のプロデュースとの掛け持ちをしているメンバーもいたため、思うように



図2 世界樹

作業が進まなかった。一つ、救いだっただのは、メンバーの全員が創作活動をしていたことである。そのため、今までにない自由で豊かな発想ができたと思う。

新たな取り組みとして、二つの事が挙げられる。一つ目は発表部門の順序を変更するということである。今まで情報プロデュース→学芸プロデュース→テキスタイルプロデュース(モード)という順序であった。しかし今回は学芸プロデュース(イラスト)→情報プロデュース(人物写真)→テキスタイルプロデュース(モード)(ドレスのファッションショー)という順序にすることで、2次元から徐々に3次元へと立体化させ、観客をより発表に引き込む工夫をした。

二つ目はグッズの販売を提案した。内容は動く絵本のDVD販売、本編に登場した人物達を利用したイラストカードやスピノフの漫画などである。しかし、こういったグッズの販売には予算面での学生会・先生方との打ち合わせが不可欠になる。その結果、期限がギリギリになってからの相談であったため、断念せざるを得なくなった。さらに、1度ストーリーが決まり制作をしている途中で先生方からの意見で内容を作り直すことになってしまった。いよいよ制作期間が短くなり、学芸プロデュースはピンチを迎えた。

そこで、作品の内容や伝え方・表現方法を大幅に変更した。中でも特筆すべきは2015年度の作品は「ファンタジー作品」であるということだ。今までの作品ではよく「夢の世界」と呼ばれる精神世界を描くシーンが多く見られた。普通ではあり得ないことを夢の中で起こすなら最初からあり得ないこと＝魔法などが使える世界を描こうということになった。ファンタジー作品にすることによって自由な発想ができ、ストーリーの制作は大変はかどった。この時、本来ならばプロットを書いて先生方にチェックをしていただくのだが、プロットを書くよりも視覚的に訴えかけられるよう漫画にし、ストーリーの内容を文書にして提出した。また、参考資料として「ブレイブストーリー」を学芸のメンバーと先生方で視聴した。似たような世界観のものを全員で共有し鑑賞することで、具体的にどういふシーンを描きたいなどより話し合いのしやすい環境を作ることができた。全員で一つのことをするという方向性や意志を固める良い機会となったのである。



図3 主人公

内容は、大学祭テーマである「パズル～繋がるpiece届けるHappiness～」に沿って考えた。ストーリーの軸になるのは「絆」という単語である。登場人物達の絆にスポットを当ててストーリーを制作した。制作する中で特に難しかったことが、この「絆」というテーマをいかに観客にストレートに伝えるかであった。

初めはセリフでの説明だけであったが、友人や先生方に試作品を見てもらった結果、もっとわかりやすい話のほうが良いという結論にいたった。そこで、視覚的に訴えかけると印象に残るのではないかと考え、イラストで「絆」という文字を大々的に出した。他にも分かりづらいという意見のあったところはイラストや説明のセリフを追加し、とにかく分かりやすいものを念頭に置いて作品を作っていた。

途中、他のプロデュースとの衝突もあった。提出期限を守れなかったことや、進捗状況に関する情報共有が不足していたことなどが原因に挙げられる。しかし、そこで逃げずにしっかり

相手と向かって話し合い、意見を交換し、切磋琢磨していくことによって、作品がより良いものになっていくのを実感した。この作品を通じて情報共有の重要性や支えてくれる友人・先輩方の有難さ、相談に乗ってくださる先生方の大切さなど、多くのことに気づくことができた。周りの方に感謝し、そしてその感謝=Happinessを届けることはできたのではないかと思います。(藺田楓)

### Ⅲ. テキスタイルプロデュース (モード)

2015年度のテキスタイルプロデュース (モード) を選択した学生は12名であった。はじめは人数が少ないことで、学生同士の一致団結も早いのではと考えていた。しかし、発表部門の演出や内容を作りあげていくまでの道のりは険しいものであった。制作は個人であるが、発表部門第3部の舞台演出はグループ活動となる。舞台では自分たちの個性をパズルの小さなpieceにたとえ、一人ひとり小さなpieceでも、それらを繋ぎ合わせることで、「絆」のパズルを完成させるという目標を設定した。

まずは作品を完成させることであるが、今年は制作活動にばらつきが目立った。裁縫を経験したことのない選択者で「ゼロからのスタート」ではあったが、考えていた以上に制作に時間を要した。しかし、制作に時間を要した分、完成度は高くそれぞれが思い描くドレスに仕上がったのではないかと考える。

次に、12名の小さなpieceを演出していく中で、大講義室の新しくなったLEDの照明機器の効果は大きかった。「PARTY600」は、ムービングライトやLEDスポット、ハロゲンスポット等のさまざまな機器が混在した制御をシンプルかつスピーディにこなすライティングコンソールで、デジタル化された照明設備により今までの照明では出せなかった舞台の背景や細かい部分まで光の調整をすることが可能となった。また、何よりも舞台に立つ学生達が照明の熱を感じることなく演じることができるようになった点である。LEDの持つ光の美しい発色が、より舞台を華やかに演出してくれたと考える。

また、今回は新しくなった照明機器の操作を覚えることにも時間を費やした。そのお蔭で、今までできなかった舞台背景を作ることができた。第3部の「美しさの扉が今ひらく」場面はこだわりのシーンとしてプロデューサーの脇黒丸奈那が手掛けた。本人の報告にもあるようにどのように自分達の扉を表現するかを何度も試行錯誤しながら、実際に海外研修に参加してきたメンバーが撮影してきたサン・ピエトロ大聖堂の天井部分の写真を使用することで、「美しさの扉」をイメージすることができた。今後、照明機器がデジタル化されたことにより表現力の幅が広がり、学生達のプロデュース力にもますます磨きがかかるのではないかと期待している。(中村民恵)

テキスタイルプロデュース (モード) では、今回のコーステーマである「パズル～繋がるpiece届けるhappiness～」から、「繋がり」を強く意識した演出を心掛けた。発表部門として、学芸プロデュースが「絆」、情報プロデュースが「感謝」をそれぞれテーマとしたのに対し、モード部門は「自立」とした。それは、私たちが多くの人との絆によって支えられながらも、

感謝の気持ちを持ち続けてこれからの「自立」していく姿を表現したいと考えたからであった。そして、「美しさの扉が今ひらく」というテーマをもとに、全部で7シーンに分け、今後の自分を思い描きながら最高のステージを作り上げた。

「私たちはどんな扉を開いていくのだろうか」ということをメンバー全員で考えたとき、本学で学んだ女性らしい美しさを追求することにした。2015年度は照明がLEDに新調され、舞台上の色と照らせる範囲が増えたことにより表現方法を大きく変えることができた。

大裁女物単衣長着(浴衣)のシーンでは、プロジェクターで、ヴァティカン市国のサン・ピエトロ大聖堂の写真を背景に映し出した。音楽に合わせて扉が開くシーンを映し出すことで「美しさの扉」を表現した。「美しさの扉が今開く」の演出は下記の通りである。

#### シーン1 「美しさへの模索と旅立ち」の扉

大裁女物単衣長着の2人がシルクオーガンジーを身にまとい、女性らしい柔らかさとしなやかさを表現した。照明を暗めに使用し、背景の映像を用いることで、これから1人で旅立つことへの不安を表現することができた。

#### シーン2 「始まりと自由」の扉シーン

大裁女物単衣長着からドレスに切り替わる大事な場面であるため、舞台全体を明るく軽やかさを出すために音楽にこだわった。始まりを意識し、音楽を先に流すことで軽やかなシーンを演出することができた。また、ワクワク感と自由さを表現するために舞台を大きく回することで、自由に生きていきたいという想いを伝えた。

#### シーン3 「根性」の扉

プロポーションが似たふたりがまるで「鏡」を見ているかのように、同じタイミングで動けるように練習を重ねた。赤色とオレンジの花柄のドレスのふたりは、女性の持つ強さをイメージした。思いっきり頭を下から上げるポーズを多く取り入れて、私は誰のものでもないという想いを表現している。

#### シーン4 「希望」の扉

黄色のオーガンジードレスで、光輝く女性の想いをひとりで表現するために、ステージを明るく照らし光の中に優しさがあふれるような照明になるように工夫した。また、祈りのポーズで未来にある希望を思い描いた。

#### シーン5 「葛藤」の扉

自分の中の葛藤と向き合う様子を表現するために音楽はハード系を用いた。その音楽に合わせてゆっくりと振りかえり、勢いよく動くことで、自分のところの中にある葛藤やライバルを意識するシーンを表現した。お互いが意識することで生まれるライバル



図4 シーン1



図5 シーン2



図6 シーン3



図7 シーン4



図8 シーン5

心をエメラルドブルーとワインカラーのドレスで演出した。

#### シーン6 「優しさ」の扉

スレンダーなドレスのデザインは、大人の女性の優雅さと女性らしさを指先の繊細な動作を入れることで表現することができた。舞台から去る際に相手に「どうぞ」と手を指し示すシーンは、これから壁に立ち向かう友人の背中をそっとおすような気持ちと大人の女性の優しさを感じた。



図9 シーン6

#### シーン7 「自立と挑戦」の扉

舞台を締めくくる最後のシーンは、舞台にひとりずつ登場し3人が同時に舞台に立つことで迫力を持たせた。一つひとつのポーズを丁寧に3人が同時に揃う静の美しさと、ひとりの女性として自立する美しさを前向きに表現した。また、新たな扉を開け挑戦しつづけていく姿を演出することができた。



図10 シーン7

2015年度は9月まで制作が遅れ、ドレスの完成がギリギリとなってしまった。舞台を作り上げることが出来るのかと不安になったが、歴代の先輩方のご指導とご協力を頂き、無事に10月の本番を迎えることができた。舞台を作り上げていく過程において、メンバー同士の意見がまとまらず何度も衝突することがあった。そのたびにお互いが歩みより、舞台を成功させたいという想いから少しずつまとまることができたように感じている。大学祭本番では、観に来ていただいたお客様に自分たちの想いが伝わるように全力を尽くした。あつという間の舞台ではあったが、純心で学んだ日々の集大成を出すことが出来た。

私たちはテキスタイルプロデュース（モード）を通して、制作することだけではなく大切なことを学んだ。計画を立てることの大切さ、コツコツと積み重ね努力をすることで身に着く忍耐力、社会人として必要なことをたくさん学んだ。その中で私たちが一番感じたことは、多くの方々を支えられているということと「絆」の強さである。

私たちはこれから純心を卒業し、自分の道に歩み出すことになる。そんなとき、さまざまな壁にぶつかっても、私たちは一人ではなく振り返れば共に学んだ仲間や先生方、先輩方そして家族など多くの方が支えてくれている。そのことを忘れずに現代ビジネスコースで学んだ「謙虚な姿勢」と「感謝の心」をこれからも持って、「美しさの扉」を開いていけるように歩み続けたい。(脇黒丸奈那)

## IV. テキスタイルプロデュース（パッチワーク）

2015年度のテキスタイルプロデュース（パッチワーク）の選択者は10名であった。活動内容としては、大学祭に向けて個人作品、共同作品、現代ビジネスコース1・2年生へのゴムの髪留めの制作と、大学祭後の個人制作と卒業研究であった。大学祭に関しての活動は、学生の報告を参照していただきたい。

毎年、思うことではあるが、2015年度、特に感じたことは、学生の計画性の甘さである。個人作品を制作するにあたり、学生の縫う技術がどの程度であるかを判断するため、また、学生

自身が自分の縫う力を知るために、小さなコースターをパッチワークおよびキルティングの技法で制作させている。このコースターを完成させるためにどれくらいの時間が必要であったかを考えて、個人制作のデザイン等を検討し、完成までの計画をたてるよう指導している。

学生が制作したいものとそれを制作するために必要な技術がともなっていれば問題はない。しかし、自分の技術力以上のものを制作したいという学生もいる。その場合には、できるだけ学生の発想を大事にしつつ、デザインを簡略化したり、一つのパーツを大きくしたりなど、多少の無理はさせつつ、完成できるようにそれぞれの段階で期限を決め、制作に取り組ませている。しかし、一つひとつの作業がゆっくりすぎて計画通り進まないのが現状である。だからといって丁寧な作業するわけではない。間に合わないことが予想されると作業が雑になり、ますます簡略化しようとする傾向がみられた。

その反面、このような学生に対して、声を掛け合い、励まし、協力しながら完成度の高いものを作ろうとする学生の姿もあった。完成した時の達成感、作ることの楽しさを実感できるのは、自分の力を精一杯発揮したときである。自分でやると決めて、目標に向かっていく姿は他の学生に良い影響を与えるものである。

プロデュースを通して、何事にも計画を経てること、予想外のことが起こった時に臨機応変にまわりを見て動くこと、自分の意見をしっかりと伝えること、そして他の人の意見を聞き、協力できることなど、身につく力はたくさんある。今は、完全ではなくてもこれから社会の中で働き生きていく上で、少しずつ自分のものにしていくことを期待する。(濱崎千鶴)

2015年度は、10名での活動となった。それぞれ個性があり、楽しい雰囲気のある作品を作ることができたと思う。初めは、このメンバーで上手くまとまることができるか不安だったが、完成に向けて一致団結することができた。

#### □個人制作

個人制作では、クッションやエプロン、バッグ、座布団、膝掛け、パソコンカバーなど日常生活に必要とされるものを、それぞれが思いを込めて制作した。個々人が、デザインを練る段階から、自らが思い描くような作品になるよう布の配色・配置を考え作品制作に取り組むことができた。

展示をする際は、カードに作品名と制作を通して感じたことや作品に込めた思いを文章で記し、作品を見てくださるお客様に少しでも私たちの作品に対する気持ちが伝わるよう工夫した。実際に、展示を見てくださったお客様からは、制作にかかった日数や制作方法などの質問を受けた。私たちの作品に興味を持って見ていただけたのではないかと思います。

#### □共同制作

##### ○共同作品

2015年度の現代ビジネスコースのテーマは、「パズル～繋がるpeace届けるhappiness～」であった。このテーマをもとにして、パッチワーク選択者全員でデザイン案を持ち寄り、話し合いの中で一つのデザインにまとめていった。デザインのポイントは、パズルのピースをモチーフとして取り入れ、色調を明るく楽しい雰囲気にしたことである。また、全体の形となる下地には、みんなで輪になって繋がるという意味から円形を取り入れた。円形のサイズは直径1.5

mである。

7月11日にパッチワーク選択者8名で布を購入しに行った。共同作品では、色を多く使用したかったため、配色に悩むこととなったが最終的に表現したかった楽しい雰囲気を出すことができたと感じる。

制作は8月5日から開始し、完成は10月17日であった。共同制作を行うにあたり、現代ビジネスコース全員がこの作品を見て一致団結しようと士気を高める役割を果たせたら良いと考えた。そこで、例年通り現代ビジネスコース2年生全員の名前をパズルのパーツにカタカナで刺繍することにした。その際、一工夫して、一人ひとりの思い出に残るようにとの思いを込め、本人希望のニックネームを刺繍した後、表布にアップリケを施した。

次に、パズルのピースが飛び出てくるプレゼント箱とサンボネット・スーの制作を行った。プレゼント箱の中心には「G」の文字をアップリケし、右下には「2015」の文字を刺繍した。箱のリボンは立体感を出すために実際のリボンを使用することにし、箱の横にいるサンボネット・スーの手に持たせるというデザインにした。すべてのパーツをアップリケした後、現代ビジネスコースのテーマを、アップリケを囲むように刺繍した。アップリケしたピースのまわりが少しあいていたため、そこにハートのアップリケを施した。

トップの制作が終わると裏布でキルト綿をはさみ、各パーツに落としキルティングを施した。また、空いているスペースにパズルはピースやハートの形でキルティングを行い可愛らしい雰囲気にした。キルティングが多く、一つの作業に時間が掛かることがあったが、プロデュースの時間や空き時間を活用しながら全員で協力して制作することができた。

#### ○くるみボタンのヘアゴム

最初は2年生全員にシュシュを制作する予定だったが、皆に喜んで身に付けてもらいたいという思いから、その時よく使われていた「くるみボタンのゴム」という案がでた。そこで、6月中旬、現代ビジネスコース2年生63名にシュシュとくるみボタンのどちらが良いかアンケートを取ったところ、くるみボタンのゴムが58名とかなり多かったため制作することを決定した。

くるみボタンの布、金具、ゴムひもは、8月17日に購入した。作業工程としては、あらかじめ用意していたく



図11 共同制作 (完成)



図12 制作工程



図13 制作工程



図14 くるみボタンのヘアゴム

るみボタンの金具に布を挟み込むという単純なものであったが、柄の配置や布を挟み込む作業を丁寧に行った。ゴムひもに関しては、接着ボンドでつなぎ目を繋いだ。

4年前から始まったこの制作を大切に受け継ぎ、昨年と同様に現代ビジネスコースの1・2年生が一致団結して大学祭を盛り上げていけるようにとの願いを込めて制作した。今回は、青や緑、黄色などの花柄や幾何学模様の布から好きなものを選べるようにした。大学祭前からも日常生活においても使用してもらうことができた。

#### □振り返り

個人制作においては、個々人が計画性を持って予定通り進められるよう努力をするべきであった。結果として、提出期限間際に完成となったため、メンバー内でお互いの進捗状況について声を掛け合うなど、相手を思いやる姿勢がもう少し必要だったのではないかと感じる。

共同制作においても、計画の甘さが徐々に露呈していったため、細かく目標を決め、一人ひとりが意識を高く持ち制作を進めるべきであった。しかし、それにメンバー全員が気づき気持ちや行動を改め、積極的に共同作品に取り組んだため無事に完成させることができた。この経験は、それぞれにとって貴重なものとなっていく。

作品を制作する中で、丁寧な作業を心がけ、確認をすることの大切さを学んだ。メンバー間でも制作が進んでいくにつれてお互い会話をして絆を深めていくことができたと思う。制作方法を学んだだけでなく、それぞれが自分に足りていないところや時間の使い方など日常生活において大切なことを学ぶことができた。(隈元瑞貴)

## V. フードプロデュース

2015年度のフードプロデュースの選択者は33名であった。授業内容としては、鹿児島の食材や郷土料理について調べ、実際に調理すること。大学祭に向けて、アップルパイとクッキーの制作、Gカフェの運営。そして最後に卒業研究であった。大学祭に関する活動とその成果は、学生の報告を参照していただきたい。

学生たちは授業の中で実際に調理することを通して、鹿児島の食に興味・関心を持ち、郷土菓子・郷土料理は、自分でも作れるものがあることを体験していた。また学外研修を通して、本物に触れ、担当の方にお話を伺うことで、次の世代に受け継がれていくことが大事であると、実感したようである。受け継ぐことに関して、実際に学生の祖母や母親が郷土料理などを作ってくれる家庭もあるようだ。現段階では、学生自身、自分一人で作ることは難しいだろうが、自分なりに時間を作って、取り組んでほしいものである。

毎回の調理実習は、グループ活動である。その日の料理をグループのメンバーで協力して作り上げるわけだが、段取りを考え、自分の役割、相手の役割を理解し、いかに効率よく作業を進めていくか、作業に入る前の話し合いが肝心となる。お互いの意思疎通ができていないと作業は思うようにはかどらない。これは、何をするうえでも大事なことである。特に、大学祭を成功させることにもつなげていかなければならない。実際、大学祭でのフードプロデュースは三つの係に分かれて活動している。報告・連絡・相談・確認を一人ひとりが行うことで、事はうまく具合に進んでいくものである。

最初はなかなか意思の疎通ができず、チーフ、サブチーフは悩んでいたようであるが、何度も試作や話し合いを行うことでまとまっていった。ここで身につけた協調性、積極性、コミュニケーション力等をこれから生きていく上で十分に発揮することを期待する。(濱崎千鶴)

2015年度フードプロデュースは食品販売部門に所属し、現代ビジネスコースは33名で活動を行った。主な活動内容としては、アップルパイ、クッキー、Gカフェといった大学祭で販売をする商品の試作や制作である。アップルパイはフードプロデュース選択者である2年生33名で制作を行い、クッキーは1年生、そしてGカフェは1年生と2年生が合同で運営を行う。

大学祭に向け活動していくにあたり、各部門（アップルパイ・クッキー・Gカフェ）ではチーフ・サブチーフを決めた。それぞれがしっかりと情報を共有することによって、全体での活動もスムーズに行うことができた。学生会主催であるリーダーシップトレーニングでは、各学科・専攻・コースのチーフ・サブチーフたちと協力して年間計画を立て、活動を行っていくために必要な情報共有の場となった。昨年の先輩方から引き継いだことを活かして、4月より各部門の試作を行った。それぞれの活動内容等を報告する。

#### □アップルパイ

純心の伝統的なアップルパイを制作するにあたり、まずは先輩方の残してくださった制作工程のビデオや、先生方の指導をもとに試作を行った。初めは先輩方のアップルパイを再現することすらできず、リンゴの煮方や生地のみとめ方一つで、味や見た目の出来が大きく左右されるのだということを実感した。

試作の段階では一人一つずつ制作したが、最終的な販売用の制作では、流れ作業で制作を行った。そのため、集中力を持続させ、次の工程を担当している人のことを考えて制作に取り組まなければ、アップルパイの出来は良くないのだということが分かった。今後、この純心のアップルパイでは「伝統的な味」だけではなく、「全員で協力することの大切さ」も受け継いでいってほしいと感じた。



図15 アップルパイ

#### □クッキー

クッキーは2年生のクッキー係を中心に試作を行い、その後1年生のクッキー係とも協力して試作を重ねた。1年生全員での制作は、2015年9月7・8日に行われたCTTの中でのグループワークで行われた。

2015年度は、例年のクッキーから味や形、大きさなど大幅に変更した。これまでの形は、手で丸めたものを焼き一口サイズであったが、今回はハートの型抜きクッキーに変更した。味はプレーンとココアに加え、2014年度先輩方が断念していたからいも味、錦江町のお茶を使った抹茶味の計4種類の販売を実現することができた。反省点としては、レシピ等を大幅に変更した初めての試



図16 ラッピングの様子

みであったが、制作の主体である1年生が作りやすいようには工夫できなかったという点である。

#### □Gカフェ

Gカフェでは毎年販売している定番メニューに加え、新商品を考案することになった。2014年度の大学祭の時期は気温が高くホット商品の売れ行きがあまりよくなかったことから、今年の新商品はアイス商品3種類、タピオカミルクティ、アップルマンゴーゼリー、ソイコーヒーゼリーを出すことになり、試作を重ねた。しかし、保健所からの指導によりタピオカの販売が不可能になったことから、実際に販売した新商品はタピオカを除いてアイスマルクティ、アップルマンゴーゼリー、ソイコーヒーゼリーである。大学祭当日は、新商品に対する評判が良く予想を上回る早さで完売することができた。何よりもお客様に喜んでいただけたことが大きな収穫である。

#### □まとめ

大学祭に向け、フードプロデュース選択者である2年生33名と1年生が協力したことで、お客様に感謝の気持ちを込めた良い商品を提供することができたと感じる。初めは何もかも手探りで試作であったが、協力してくれたメンバーの力や、試食や試飲を通してアドバイスくださった現代ビジネスコースや食品販売部門の先生方のおかげで、販売できる商品まで辿り着けたのだと思っている。

アップルパイ制作は流れ作業で行ったが、そこで「次の仕事をする人のことを考えて自分も仕事をする」ということの大切さを学ぶことができた。クッキーは新しい試みであったため、販売実現にむけた試作の回数は多くなってしまった。しかし、新しい形や味も大盛況であり、努力は報われたのではないかと感じる。Gカフェでは新商品の中でも特に人気を期待していたタピオカミルクティが販売できなくなるなど、本当に沢山の壁にぶつかった。定番である商品の味の再現や提供までのスピード等の改善に、早い段階で工夫すればよかったと感じる。

本当に周囲の方々に支えられて活動を行うことができ、そして販売に至ることができた。失敗ばかりではあったが、フードプロデュースの活動を通して協力することの大切さを実感できた。結果も残すことができたが、さまざまなことに失敗を恐れずチャレンジをできればもっとよかったのではないかと感じている。後輩たちにも、苦労の中にある達成感や喜びを、活動を通して見出してほしいと強く思う。(田中彩乃)

## VI. 地域貢献プロデュース

2015年度地域貢献プロデュースは、活動3年目を迎え、特別研究の一つとして単位化された。2年次の後期開講科目として配当されているが、学内外での地域活動が中心となるため、時間割上の授業配当はない。1年次の春休みに実施するインターンシップを選択しない場合には、地域貢献活動に参加するよう指導を行った(表1)。

表1 平成27年度の主な学外活動

獲れたて新鮮あったか市(サティライフ紫原館)	特産品販売	2015年2月15日
半島隅くじら元気市(ドルフィンポート)	特産品販売	2015年2月28日, 3月1日
純心水田プロジェクト(錦江町田代川原)	田植え	2015年4月11日
	除草	2015年5月9日
	稲刈り	2015年8月12日
錦江町いきいき秋祭り(錦江町本庁駐車場)	特産品販売	2015年11月8日
錦江町田舎市場(オブシアミスミ)	特産品販売	2016年2月6日~2月21日

選択した9名の空き時間が異なるため、全員で集まることは難しい状況ではあったが、学生同士で大まかな担当を決め、地域貢献を選択していない学生の協力も得ながら、活動を行った。学外での活動については、インターンシップの研修ノートに倣い、それぞれが記録した活動をとりまとめ、代表で1名が報告書として、情報を集約することにした。また、後輩に活動を引き継ぐために自分が担当した活動についてのレポートを課した。

2015年度は、純心水田で収穫したお米を使った錦江町とのコラボ商品を企画し、県内のローソンで販売するため、夏休みから準備を行った。学生から募集したアイデアをもとにイケダパンに製造をお願いし、2015年9月から10回以上の試作を繰り返し、完成した「生どら焼き」は2016年3月1日から店頭に並んだ。テレビCMの撮影や県庁での記者発表やラジオやテレビの生番組への出演など、後期の単位認定試験終了後の春休みの時期のため、内定先の研修などもあったが、最後までみんなで協力しながら自分たちの役割を果たすことができたのではないかなと思う。このような教育の場を提供していただいた錦江町役場企画課、本学地域貢献推進室のみなさまに感謝の意を表したい。

1年次に純心水田プロジェクトや大学祭での特産品販売に関わり、地域貢献活動に興味を持ち、授業を選択した学生もいる。ボランティアでこの活動を支えてきた先輩たちの意志は、確実に後輩に引き継がれていると感じる。今年度の活動の詳細については、チーフの山下佳連の報告を参照されたい。(森永初代)

地域貢献プロデュースは錦江町の方々にご協力いただき2014年に引き続き「純心水田プロジェクト」を実施した。「純心水田プロジェクト」の活動では、田植え、除草、稲刈りの作業を行う。今年は、天気に恵まれすべての作業に参加することができた。錦江町の方々の丁寧なご指導のおかげで収穫したお米は、「純錦米」と名付け大学祭で販売することになった。その際、お米の袋に貼るパッケージラベルも錦江町の方々と打ち合わせしながら作成した。

特産品販売では、最初は何も意識せずお客様に声をかけていた。しかし、何度か参加することによって、特産品の良さをいかにアピールするかを考えながら、お客様に声かけができるようになった。生産者の方と一緒に販売することで、直接その特徴を伺い、実際に試食し、商品の良さ、味をお客様にうまく伝えることができた。

おはら祭に向けた練習は、1年次の2月から、一つ上の先輩方のご指導によりスタートした。

おはら祭当日は、1年生2年生ともに一致団結して息の合ったおはら節を踊り、楽しく参加することができた。錦江町のキャラクター「でんしろう」も踊りに参加し、さらに盛り上がった。踊り連を見に来た子供たちが「でんしろうだ」と喜んで声をかける姿を見ると、知名度が上がっていることを感じ、嬉しかった。

2014年と異なる活動は、宿利原地区の特産品である寒干大根の「漬物」のパッケージの作成、錦江町とのコラボ商品の生どら焼きなど(図17)、さまざまな新たな企画に参加できたことだ。まず、「漬物」のパッケージは、学芸プロデュースの力を借りながらラベル作成を行った。どのようなデザインにしたら若者が手に取りたくなるか、メンバーで話し合いながら考えた。コラボ商品の企画では何度も会議を行った(図18)。私達学生は、企画商品に携わることが初めてであり、最初は何から手をつければいいのかわからないことだらけだった。しかし、先生方、錦江町の方々の力をお借りしながら自分たちができることを見つけ、取り組んだ。



図17 生どら焼き



図18 企画会議の様子

この企画に携わることで、絵を描くことが得意な人がいたことに気付き、新たなメンバーの一面を知ることができた。また、さまざまな企画に参加することによって、錦江町の方々との距離を縮めることもできた。

私は、今まで人前で何かをするという立場になんたことがなかった。今までは「誰かがやってくれるだろう。自分がしなくても大丈夫だろう」とどこか他人事だった。しかし、地域貢献プロデュースのチーフという役目を務めることになり、最初のうちは、自分のこともしっかりできないのにと不安でいっぱいだった。それ以上に、語彙力がなく文章を書くのが大の苦手だったが、毎回の活動後に活動記録を書くことで以前に比べ文章を考えることができるようになった。

私がチーフとして活動することができたのは、周りの方々の支えがあったからである。一人で抱え込んでいっぱいになることもあったが、辛い時にはプロデュースの仲間や卒業生、先生方、錦江町の方々のおかげで、乗り越えることができた。改めて人と人とのつながりを大切にしたいと思った。錦江町の方々と関わることで、今までにない多くのことをこの1年で経験することができた。このような経験をさせていただいた錦江町の方々にとても感謝している。(山下佳連)

## 結 び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題で、文部科学省の特別補助である「学

部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」の交付を受けて、進められた。

2015年度のGプロジェクトのテーマは、大学祭全体のテーマである「Present from us～静と動の贈り物～」をもとに学生が考え、「パズル～繋がるpiece届けるhappiness～」に決まった。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動つまり協働の中でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた5つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めるといった目的を掲げてから、8年も経過している。

毎回、“Gプロジェクト”を通じて、学生が多くの困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。友人や地域との協働で何かを成し遂げるためには、多くのことが要求される。すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さと「確認」の必要性を実感したはずである。これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが、現代ビジネスコーススタッフ全員の願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられなければならない。また、学士課程教育における学士力を意識し問題解決能力の育成など教育の質的向上に向けて成長させていかなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。

